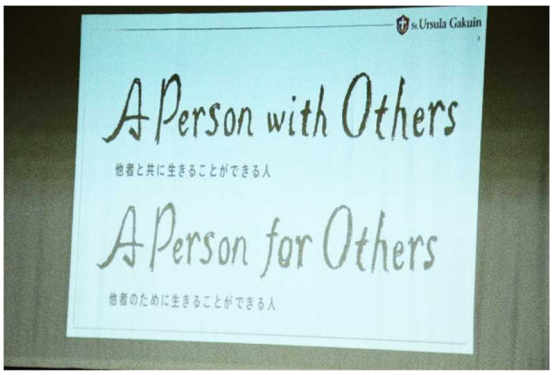
「知事とのフレッシュトーク」
（令和２年１２月１０日（木）八戸聖ウルスラ学院中学・高等学校）　概要

知事が高校生の皆さんとこれからの青森県や自分たちの将来に関して意見交換を行う「知事とのフレッシュトーク」について、八戸聖ウルスラ学院中学・高等学校での実施概要をお知らせします。

生徒による学校紹介の後、代表生徒と知事が意見交換を行いました。

（参加：高等学校２学年生徒　８７名、中学校３学年生徒　２９名　計１１６名）



（発言生徒１、高校２年女子）

私は将来、小学校教諭になりたいと考えています。

「ＳＤＧｓと青森県」というテーマで調べ学習を行った際に、私たちのグループでは子どもたちへの虐待件数が増加していることに注目しました。新型コロナウイルス感染症の影響によって家で過ごすことが多くなって、全国的にも虐待件数が増加していることが分かりました。

そのため、青森県の虐待対策や子育てをする親への対応策、成功事例などについて伺いたいです。

また、先日、青森県代表として「日本の次世代リーダー養成塾」に参加しました。今年はオンラインでの開催だったのですが、学生が持つＩＣＴ機器の整備が都会より遅れているように感じました。ＩＣＴ機器の整備など、子どもたちに対する今後の青森県の対策や方針を聞かせてください。

（知事）

日本の次世代リーダー養成塾は、全国各地から集まって意見交換するほか、食事の時などの何気ない会話で青森県との違いなどを知ることもできる良い機会なので、今年度は新型コロナウイルス感染症の影響でオンライン開催になり少し残念でしたが、青森県ではこれからも養成塾の取組に参画していきたいと思っています。

（こどもみらい課）

子ども虐待について説明します。子ども虐待の種類は、身体的虐待、性的虐待、ネグレクト、心

理的虐待の４つに分類されています。ネグレクトとは育児放棄のことです。また、心理的虐待は子どもに対する暴言のほか、子どもの前でのＤＶも入ります。

県内児童相談所の虐待相談対応件数は年々増加傾向にあって、令和元年度は過去最多の１，６２０件となりました。相談種別としては、心理的虐待が最も多く、身体的虐待、ネグレクト、性的虐待の順となっています。令和２年１月から６月までの半年間の相談対応件数を前年と比較すると、合計で１６３件増加しています。増加理由は、虐待に対する認識が高まってきたことと、新型コロナウイルス感染症による生活環境の変化やストレス等の影響の可能性もあると考えています。

こうした児童虐待に係る県の取組として、まず、児童相談所虐待対応ダイヤルがあります。「１８９（いちはやく）」にかけると、近くの児童相談所につながります。

このほか、虐待の発生は、子育ての悩みを相談する相手がいないなどの社会からの孤立も要因として挙げられていることから、昨年度は、子育て世帯の社会からの孤立を防ぎ、助け合いながら子育てをしようという環境をつくるための動画・写真コンテストや子育て応援イベントを開催しました。

また、経済的な課題も要因として挙げられているので、経済的な負担を軽減するために、あおもり子育て応援パスポートを発行しています。パスポートと同じマークのあるお店で見せると割引などのサービスが受けられます。医療費の負担を減らすために、市町村が支給した子どもの医療費に対し、県がその一部を負担するなどの取組も行っています。

将来、小学校教諭になりたいということですので、子ども虐待に対する学校、教職員の役割についても説明すると、まず、虐待の早期発見に努めて、仮にそういう子どもがいたら関係機関に連絡することなどが挙げられます。もし、小学校教諭になって虐待の場面に遭遇した場合には、虐待という確証がなくても関係機関に連絡し、保護者との関係よりも子どもの安全を優先するようにしてください。

（学校教育課）

ＩＣＴ環境の整備について説明します。

国のＧＩＧＡスクール構想により、県内公立小・中学校におけるＩＣＴ環境の整備は今年度中に１人１台の端末が導入される見通しです。また、県立高等学校については、新しい指導要領が始まる令和４年度には１人１台の環境が整う予定です。

なお、私立学校については、各学校の方針のもとで進められることと思います。

高校におけるＩＣＴを活用した学習活動の方向性としては、確かな学力の向上や交流及び体験の充実による「人財」の育成を目的に、授業支援ツールとしての活用を考えています。

小・中学校での学習場面として、具体的には、一斉学習として、写真等の拡大・縮小、画面への書き込み等を活用することで興味・関心を高めることが可能となるほか、個別学習として、デジタル教材などを活用し、自らの疑問を深く調べたり自分に合った進度で学習したりすることが容易になります。さらに、協働学習として、授業や他地域又は海外の学校との交流学習で、子ども同士が意見交換をし、思考力などを育成するといったことも想定されています。

（知事）

子ども虐待にしてもいじめにしても、人と人とがうまく触れ合えない関係になってしまっていて、

愛情を持って触れ合うことができない世の中になったのかと寂しく思っています。

小学校教諭になったら、とにかく子どもを好きになってください。そして、大好きな子どもたちのために、どのように愛情を注ぎ、一人ひとりを見てあげられるか、見守ってあげられるかということを考えることができれば、すごくいい先生になれると思います。

では、小学校教諭になるための説明をします。

（教職員課）

まず、教諭になるには大学で勉強をして、教員免許を取得することが必要です。教員免許は小学校や中学校・高校など、学校の種類ごとにあり、その上、中学校・高校は教科ごとにも分かれています。取得には大学で必要な単位を取らなければなりません。

次に、県内の公立学校の教諭になるには、県教育委員会が実施する筆記試験や面接試験を受ける必要があります。青森県の教員として求められるのは、広い教養、充実した指導力、心身の健康、教育者としての使命感・意欲、児童・生徒に対する深い教育的愛情はもちろんのこと、得意分野を持つ個性豊かで人間味あふれる人材です。

小学校教諭の倍率は２倍くらいで、目指す人がだんだん少なくなってきています。夢の実現に向けて頑張ってください。

（知事）

どこで先生になってもいいですが、希望はありますか。

（発言生徒１）

地元に戻って、青森に貢献したいと思っています。

（知事）

うれしいです。これからも勉強を頑張ってください。

（発言生徒２、高校２年男子）

私は将来、国際的な仕事に就きたいと考えていて、その中でも特に関心を持っているのは、青森県のような地方都市と世界のつながりについてです。

「ＳＤＧｓと青森県」というテーマで調べ学習を行った際、私たちのグループは、若者が地元に魅力を感じずに青森県から離れてしまうということを課題と捉えてプレゼンテーションを行いました。八戸聖ウルスラ学院で

は英語や国際交流に力を入れているため、多くの生徒がグローバルな仕事に興味を持っています。

しかし、私たち中学・高校生が実際に活躍している方を知る機会は、現状ほとんどないと思います。そこで、県内にどのようなグローバル人材がいるかを教えてください。

（知事）

県内でもグローバルに活躍する「人財」が各分野にいるので、それぞれ説明します。

（企画調整課）

まず、ＳＤＧｓについて説明します。

皆さんが学んできたＳＤＧｓは世界中でどんどん取組が始まってきています。青森県が掲げる「買ってよし」「訪れてよし」「住んでよし」という将来像にも関係していて、各部局がいろんな分野にＳＤＧｓの考え方を取り入れて事業を企画立案し、青森県が世界に打って出て、世界から選ばれるようになるために取組を進めています。

また、県民の方にＳＤＧｓを理解してもらうためにセミナーやワークショップも開催しています。

これからも、そうしたＳＤＧｓの理解を進めるための取組を続けていきたいと考えています。

（地域活力振興課）

県では、青森県を拠点にして「世界へ打って出る」といった気概を持った「人財」の育成に取り組んでいます。高校生向けの「あおもりグローバルミーティング」は、今年度はオンラインでの開催でしたが、有限会社柏崎青果やブナコ株式会社といった世界を舞台に活躍をしている会社の社長をお迎えして開催しました。大学生や社会人向けの「あおもりグローバルアカデミー」は、三沢市との協働により三沢市の国際交流教育センターで実施しているもので、今年度は米軍三沢基地内でのプログラムはありませんでしたが、多彩な講師陣を迎えて１０月から開催しています。

この２つの事業では、県内にいながらグローバルに活躍されている方を講師としていますので、注目するグローバル人材として紹介しますと、三沢基地内大学を卒業して、三沢基地にて米軍消防士として活躍している外川頌大さん、元国連職員で青森からできる国際協力に取り組む菊池昌子さん、中学校教員で日本人初のシッティングバレーボール国際審判員の山道律人さん、コンサルティング会社を設立し、日本企業の台湾進出のサポートを行っている外崎真由美さんです。このほかにも、県内にはまだまだたくさんの人がグローバルに活躍しています。

（新産業創造課）

青森県内の企業でも、実はグローバルに活躍する企業がたくさんあります。今日は、その中から株式会社リンクステーションというＩＴ企業を紹介します。

この企業は、日本ではセブンイレブンのチケット発券システムの一部を手掛けていて、例えば、皆さんがコンサートのチケットやテレビゲームを購入しようとする時に、この企業のＩＴシステムが使われています。また、台湾に現地法人を構えていて、台湾のチケットを日本にいながら、日本のチケットを台湾にいながら、それぞれ入手できるように取り組んでいるところです。

（国際経済課）

グローバルな活動として、県産品を輸出するという仕事もあります。国内市場が縮小していく中で、隣の東アジア、東南アジアなど人口の増加や経済発展を遂げている所に県産りんごなどを輸出することは、外貨の獲得や経済の活性化につながります。

県でも、県内企業の方と一緒になって、海外に行って商談会をしたり、プロモーションをしたり、逆に海外のバイヤーを本県に呼んできて商談会をしたり、県内の企業や産地を見てもらったりしています。県内企業の方にも非常に興味を持って参加してもらっています。

現在は、新型コロナウイルス感染症の影響により、オンラインで商談会をしたり、プロモーションをしたりしています。

（知事）

グローバルな企業の話がありましたが､青森県からも韓国や台湾、香港、上海に頻繁に営業に行っていて、今は新型コロナウイルス感染症の影響がありますが、実は、国際交流はもとよりビジネスでも元気です。また、子どもたちとの交流も盛んで、韓国や台湾の高校生が青森県に来て、農業技術やお土産の作り方を学んだりしています。

このように、青森県だから世界とつながっていない、何もしていないということはなくて、県レベルでもすごく行き来があります。だから、君たちのようにグローバルな意識を持った若い｢人財｣には、すごく期待をしています。

将来の夢が国連職員ということですので、英語力が必要になります。発音の正しさも大事ですけど、気持ちが通じることが大事ですから。夢がかなえられるよう頑張ってください。

（発言生徒３、高校２年女子）

まだ明確に将来のことを決めていませんが、新聞記者など、マスコミ関係の仕事に憧れを持っています。

「ＳＤＧｓと青森県」というテーマで調べ学習を行った際、私たちのグループは「海の豊かさを守ろう」という項目に着目しました。八戸市をはじめ青森県には漁業が盛んな町がたくさんあります。しかし、温暖化の影響で魚の漁獲高が減ったり、海がゴミで汚れてしまったりという問題を抱えています。魚が獲れなくなることで、名産品として売り出している商品づくりにも影響が出てしまうことに不安を感じました。もちろん海の豊かさを取り戻すための活動は必要ですが、新しいアイデアをどんどん打ち出していくことも必要だと感じています。

知事が注目している青森県の新しい名産品などがあれば教えてください。

（知事）

青森県全体の命を守ることや産業のこと、自然のことを考えると、水を守ることがすごく大事なので、知事就任以来、天から山に降る水が川になって海に入っていく水循環に着目し、これをどう再生し、水の良さや性質の良さをどう保全していくかということに取り組んできました。これを「山・川・海をつなぐ水循環システム」の再生・保全と言っています。

（農林水産政策課）

本県の安全・安心な農林水産物をこれからも継続して作っていくためには、安全・安心な水の確保が重要になります。

県では、この水資源を維持していくために、山・川・海をつなぐ一連の水の流れを一体的に捉えた水循環システムの再生・保全の取組を進めています。

海の豊かさを取り戻す取組としては、減少傾向にある漁獲量の安定と向上のため、自然まかせに獲るのではなく、つくり育てる漁業を推進しています。具体的には、ヒラメなどの稚魚の放流、ホタテ貝やサーモンなどの養殖技術の指導等に取り組んでいます。

魚類にはいろいろ習性があるので、その習性に合わせて、産卵や稚魚の育成の場となる藻場、幼魚の育成場、成魚が生息する漁礁漁場を一体的かつ広域的に整備して、水資源の増大を図っています。

このほか、市町村や漁業団体と連携して、海岸や漁港で清掃活動を行いながら環境保全の活動に取り組んでいます。

（総合販売戦略課）

注目している名産品を紹介します。まず、さくらんぼ「ジュノハート」です。主な特徴は美しいハートの形や５００円玉以上の大きさ、そして上品な甘さがあることです。去年は県内限定で販売しましたが、今年は東京や大阪のデパート、果実専門店で販売し、多くのお客様に喜んでもらいました。ジュノハートの中でも一際大きく品質の良いものを「青森ハートビート」と名付け、高級感ある入れ物で販売してイメージを高めています。

次は「青森きくらげ」です。寒い地域でも育てやすいように開発した新品種で、ほかのきくらげに比べて肉厚でコリコリした歯応えがあります。今年の７月にデビューして、県内のスーパーなどで販売し、こちらも多くのお客様に喜んでもらいました。今年の販売は終了しましたが、和食・洋食・中華、何にでも合うので、ぜひ来年試してみてください。

最後は「青い森紅サーモン」です。県産のりんごとにんにくが入った専用のエサで育てた新しいご当地サーモンで、美しい紅色の身と脂のノリを抑えた強い旨味が特徴です。今年１１月にデビューをして県内限定で販売しています。今シーズンは来年３月までの販売を予定していて、数量限定でスーパーや飲食店などで取り扱っています。生で味わう身のおいしさがお勧めですので、お刺身やお寿司などでぜひ試してみてください。

このような様々な名産品が県内外で親しまれていますが、気候や消費者の求めるものは絶えず変化していますので、これからも新しい名産品をどんどん提案していきたいと思います。

（知事）

青森のさくらんぼは、とてもおいしいのですが、青森県産というだけで安く扱われていたので、ジュノハートを開発して技術水準が高いことやすごくおいしいことを示しました。そのことで市場での価値が上がり、農家の収入が上がることにつながっていきます。

このように、知事就任以来、「攻めの農林水産業」を打ち出し、販売に力を入れてきたことで、農家１戸当たりの農業所得を約２倍にまで上げてきました。農業で食べていけるということを示していくためには、戦略的に取り組む必要があります。

サーモンについては､十数年前に香港の魚売り場を見る機会がありましたが､一面がサーモンだったのです。なぜかというと、北欧の国々が戦略的にアジアにサーモンを売っていて、昔は生で絶対に食べなかったアジアの食文化はガラリと変わり、普通に生で食べるようになりました。

サーモン市場というのはすごく大きいので、青森県では、海峡サーモン、青森サーモンに続いて、青い森紅サーモンと、この３本で年間を通じて販売できて、北欧の国々に対抗できるようになりました。もちろん味も青森県の方が断然いいです。今後は、香港などでも売っていきたいと考えています。

このように戦略的に営業活動を展開しているのですが、その中で、県職員がどのような販売活動をしているのか紹介します。

（「決め手くんが行く！」ダンス披露）

（知事）

このように国内や海外でお客様に直接ＰＲして、様々な県産品を知ってもらったり、バイヤーを呼んで商談会を開催したり、時には生産者も一緒に行って、生産者から直接説明をしてもらったりしており、そういったことで全国いろんなところから「青森を応援しよう」と、特にお店の方がすごく協力をしてくれます。

将来、新聞記者になりたいということなので、今日来ている記者にどういうことが必要か聞いてみましょう。

（新聞記者）

世の中で起きていることに常に疑問を持つことと、今のうちからいろいろなことを経験して自分の知識の土壌を増やしていくことが大事だと思います。ニュースを見たり、新聞を読んだりして、頑張ってください。

（知事）

学校の勉強も大事ですが、社会の仕組みについて、例えば、なぜ青森県は３本のサーモンを売り出しているのかなど、いろいろと疑問を持つことが大事だと思います。

将来の夢に向かって頑張ってください。

（発言生徒４、高校２年女子）

英語科生として勉強に力を入れてきた英語力と、台湾への長期留学の経験で得た中国語力を生かして、将来はキャビンアテンダントになりたいと考えています。

「ＳＤＧｓと青森県」というテーマで調べ学習を行った際に、私たちのチームは、「青森県は海外の方にとって､過ごしやすい県なのか」というテーマでプレゼンテーションを行いました。

その際に、コロナ禍以前の青森県は、外国人観光客の伸び率が全国第１位だったそうですが、ウィズコロナ時代のインバウンド向け観光として、今後どのようなことを行っていくのか教えてください。

（知事）

すごく大事なことだと思います。まさに今、仕込みというか準備をしているところですので、そのことを説明します。

（誘客交流課）

誘客についてですが、令和元年に県内に宿泊した外国人の数は、震災前と比べて約５．７倍に増えています。東北では１位の伸びで、全国平均が約３．９倍ですので、本県の伸びがどれだけ高いものかが分かります。平成２９年には、前年と比べて約１．７倍となり、全国１位の伸び率となりました。

このように青森県には韓国、中国、台湾、香港などを中心にたくさんの外国人が来ていました。観光の分野では１人が１泊すると１人泊、２泊すれば２人泊という数え方をしますが、令和元年の外国人延べ宿泊者数は過去最高の３５万７千人泊で、東北では２番目ですが、実は全国ではまだ３１番目で、まだまだ頑張らなくてはいけません。このため、知事も直接海外の旅行会社に行ってＰＲしています。

ところが、新型コロナウイルス感染症の影響により、外国人の方をほとんど見かけなくなりました。でも、海外旅行ができない今だからこそ青森県の魅力というものを全国、世界へ広げて、もし行き来ができるようになったら青森に行きたいという思いを持ってもらうことが大切です。

そこで、今は英語、韓国語など５つの地域向けのフェイスブックや中国のウェイボー、ウィーチャットを活用して青森県の情報を発信しています。

また、韓国のソウルにある青森県の事務所やインバウンド対策を支援してくれる海外在住のコーディネーターを通じて、随時オンラインで現地の旅行会社へのＰＲ活動を継続しています。

東アジアには、青森県を応援してくれる方がたくさんいるので、こういった方々とのつながりを大切にして誘客活動を行っています。

例えば、長年親交がある韓国の有名な写真家の方に、県内で撮った写真を韓国の有名な雑誌や新聞に掲載をしてもらっています。また、その写真家とのつながりにより、韓国の人気タレントが出

演するテレビ番組を本県に誘致することもできました。これにより、実際に韓国から来県するお客様が増えたこともありました。台湾の国民的女優と呼ばれる方とも親交があり、一昨日、知事もオンラインでこの方が司会をするテレビ番組に出演しています。さらに、世界的に有名なシェフが経営する台湾のミシュラン二つ星のレストランでは、まさに今、青森県フェアをやっていて、昨日、オンラインにより知事が直接お客様にＰＲしました。

このように、青森県では、ウィズコロナの時代にあっても人と人とのつながり、絆を大切にし、これらを基に信頼関係を構築して、インバウンドの誘致に取り組んでいます。

今後、コロナ禍が収束した後も、いろいろな方々の協力を得ながら、青森県へのインバウンドの誘致を進めていきたいと考えています。

（知事）

地味なことを言うと、オンラインやＳＮＳだけではなく、県内観光地の絵葉書を作って手書きメッセージを添えて送ったりもしています。

反転攻勢の時に観光客を取り戻そうと、みんなですごく地道なことも真面目にやっています。

（誘客交流課）

県では、このほかに、県内に住む外国人が日常生活や社会生活を県民の方と共に円滑に送れるように、昨年１１月から青森市にあるアスパム２階の国際交流ラウンジに外国人相談窓口を開設し、中国語、ベトナム語、英語、韓国語を話せる相談員が外国人の様々な悩みに対応しています。そのほかの外国語については、翻訳機を使用して対応しています。

相談方法は、対面のほかに電話、メールにも対応しており、最も多いのは電話による相談です。

開設してからの１年間で７０件の相談があり、その内容としては、翻訳や通訳に関するもののほか、雇用・労働問題、日本語学習、社会保険や医療などに関する相談がありました。

県内に住む外国人は年々１０％ずつ増えていて、外国人の相談に応じる機関の役割は、今後重要になっていくと考えています。

（知事）

将来の夢がキャビンアテンダントということで、飛行機に乗る際にどこかで再会できたらうれしいです。

どの航空会社でもいいですが、キャビンアテンダントは会社にとってのアンバサダー、また、日本の航空会社だったら日本人としてのアンバサダーであるという気持ちが大事だと思います。そのために、日本の文化など、いろいろ学んでもらえたらうれしいです。

将来の夢に向かってしっかりと前進してください。

今日は、皆さんと意見交換ができて、大変楽しかったです。素敵な未来に向かってしっかりと歩んでくれていると感じました。また、八戸聖ウルスラ学院は、こんなに良い生徒たちが一杯で、君

たちがいてくれるから、これからの青森県だけではなく、これからの世界や地球も大丈夫だと思いました。

今日の意見交換も含め、いろいろな場面でいただいた意見については、県として事業化することもあり、今求められていることが何かという気持ちを大事にして取り組んでいます。

今日は、本当にありがとうございました。